国立国語研究所学術情報リポジトリ

新聞の漢字含有率の変遷：明治・大正・昭和を通じて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梶原, 滉太郎, KAJIWARA, Kōtarō メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001314

新聞の漢字含有率の変遷
——明治・大正・昭和を通じて——

梶原滉太郎

1. 新聞の歴史の概観

こんにち見られるような新聞の直接の起源は，わが国では明治時代の初期にさかのぼることができる。その起源から100年あまりの間に新聞は内容・形式ともに大きく変化したのであるが，企業としての新聞社の変遷の重要な節目は明治時代に少なからず含まれている。のちの大正・昭和時代にも注目すべき変化はみられるけれども，まず明治時代の状況を少し詳しく述べておくのが有効であろうと思われる。この章では主に明治時代の様子について記し，大正・昭和については他の章で必要に応じて記すことにする。

明治時代の特に初期の新聞には大新聞と小新聞の二系列があった。大新聞の内容は政論を中心とし，文章は大部分の記事が漢文直訳体であり，原則としてふりがな（ルビ）を用いず，一面分の広さは小新聞の約2倍であった。そして主な読者は官吏・学者など限られたインテリであった。一方，小新聞の内容は市井の出来事に関する報道記事を中心とし，社説を載せず（ただし，明治20年ごろになると有力な小新聞は社説を載せるようになった），大部分の記事を一種の口語文で記し，原則としてすべての漢字にふりがなをつけた，いわゆる「総ルビ」である。また，小新聞の主な読者は大新聞のそれとは対照的な市井の人であった。なお，小新聞は大新聞に比べて種類が多く，各紙の編集方針にもそれぞれ違いがあるのを反映して内容の“軟らかさ”にもかなりの幅があった。

次に主な大新聞と小新聞の名称その他を記しておこう。[注1]

大新聞……東京日日新聞（明治5年2月創刊，昭和18年以降は『毎日新

聞』となる）・郵便報知新聞（明治５年６月創刊）・朝野新聞（明治５年11月創刊の『公文通誌』を同７年９月に改題したもの）・東京曙新聞（明治４年５月創刊の『新聞雑誌』を同８年１月『あけぼの』と改題し，同年６月にそれを更に改題したもの）

小新聞……読売新聞（明治７年11月創刊）・東京絵入新聞（明治８年４月創刊の『平仮名絵入新聞』を同年『東京平仮名絵入新聞』と改題し，同９年３月にそれを更に改題したもの）・仮名読新聞（明治８年11月創刊，同10年３月『かなよみ』と改題）・朝日新聞（明治12年１月創刊）・絵入自由新聞（明治15年９月創刊）・絵入朝野新聞（明治15年11月創刊）

上記の小新聞に属していたもののうち『読売』は早くから口語文を採用し，総ルビの表記でニュース記事を主とし，それに民衆指導的な味つけをしたので，市井の人によく読まれ非常に多くの部数が出た。たとえば明治10年の『読売』の年間発行部数は600万部あまりで，『東京日日』の約370万部や『郵便報知』の約200万部（この両者は大新聞）に大きく水をあけている[注2]。また，『朝日』も小新聞に属しており，早くから報道の正確さと速さを重視し，文体・表記ともに民衆に親しみやすく，内容の程度・品位も一定のレベル以上に保っていた。そして明治12年の創刊以来，順調に発行部数をふやしてゆき，明治16年には『読売』を追い越してしまう[注3]。小新聞としてスタートとしたこの二紙は，そののち幾多の試練を経て現在の隆盛に至っている。二紙ともに“本格的小新聞”として，他の小新聞よりも記事内容・企業体としての強さなどが格段にしっかりしていたということである。

また，上記の大新聞に属していたもののうち現在もそのまま続いているものはなく，『東京日日新聞』は明治44年に大阪毎日新聞社の手に経営が移り，昭和18年に『毎日新聞』と紙名が改められて今日に至っている。そしてもう一つの代表的大新聞であった『郵便報知新聞』も経営難などで昭和17年に読売新聞社に合併吸収されて『読売報知』となり，昭和25年からはスポーツ・芸能記事を主とする方針をはっきり打ち出し，現在は『報知新聞』としてスポーツファンに親しまれている。

以上の概観から明らかになったことは第一に，明治初期から現在まで新聞社が倒産・身売りなどをせずに続いている例はきわめて少なく，それに該当するのは“本格的小新聞”としてスタートした『読売』と『朝日』の二紙に過ぎないこと。第二に，それと関連して明治初期に大新聞としてスタートしたものは，その後の売れ行き不振や新聞紙条例[注4]による弾圧などによって例外なく経営が悪化し，廃刊や身売りが相次いだことである。ただし，『東京日日』の場合は，大阪毎日新聞社に身売りをしたにもかかわらず，それまでの編集方針を目立って変えられることがなかった。それは，経営権が移ってから30年あまりも紙名変更をせず，買い取った会社が既に持っていた『大阪毎日新聞』と二本立てで経営していたことと関連があるであろう。このように大新聞の中で『東京日日』(昭和18年以降は『毎日』) だけが現在まで大変貌をすることなく続いた理由として，この新聞が創刊のころ「御用新聞」といわれる一面を持ち，明治初期から行われた新聞弾圧の影響が比較的少なかったこと，また，大新聞出身の誇りを失わない範囲で，おもしろい記事を少しずつ載せるようにしていったこと，などが考えられる。

これまで大ざっぱに述べてきた事柄からも，明治初期から現在までの100年あまりにわたって続いてきた新聞はごく少ないことが明らかになったと思う。その中から，あえて一紙を中心資料としてそのことばを考察するとすれば，大新聞に起源を持つ『東京日日』(『毎日』) を取り上げるのが妥当であろう。したがってこの稿では『東京日日』(『毎日』) を中心に考察する。また，他の有力資料である『郵便報知』・『読売』なども補助資料として使うことにする。

2. 漢字含有率の実態

2-1 明治10年代の大新聞の実態

明治10年代は大新聞と小新聞が内容・形式ともに最も大きな差異をみせる時期である。第2章では，その時期における二系列の新聞の漢字含有率の比較から始めることにし，この節ではまず大新聞の実態について述べる。第1

第1表　大新聞の漢字含有率一覧表

紙　名・日　付	漢　字	ひらがな	カタカナ
『東京日日新聞』			
明治 10. 11. 10	66.1%	13.8%	20.1%
10. 11. 12	65.3	20.1	14.6
10. 11. 13	60.5	28.0	11.5
『郵便報知新聞』			
明治 10. 11. 10	67.7%	13.1%	19.2%
10. 11. 12	66.3	17.4	16.3
10. 11. 13	63.3	13.8	22.9

(注)　広告・図表は除く

表は，明治10年における代表的大新聞二紙について選んだ，連続する3日分のデータである[注5]。この表を一応「漢字含有率一覧表」とよぶことにするが，参考のためにひらがな・カタカナの含有率もあわせて載せておいた。第1表以外の「漢字含有率一覧表」においても原則として第1表と同じ方針である。なお，大新聞の二紙とも明治10年11月11日（日曜日）は休刊日であるため，第1表に掲げた3日分は実質的に連続する号である。この稿で用いる漢字含有率（これを K_1G とする）の計算方法を式に表わせば

$$K_1G=\frac{\text{漢　字}}{\text{漢字＋かな}}\times 100(\%)$$

である。K_1G の値は小数点下第二位を四捨五入した。また，かなの合字（と〔こと〕，ゟ〔より〕，コ〔コト〕，ヿ〔トキ〕など）はそれぞれ一字と数え，漢字の合字（卅〔三十〕など）もそれぞれ一字と数えた。そして，アルファベットやカッコや句読点などはもちろん除いてある。この稿で K_1G を求めるために調査した紙面は原則として，題字・欄外の日付や曜日や号数・広告・図表などを除いた残りのすべてである。もしもそれ以外の紙面を扱う場合はそのつど記す。

さて第1表から両紙の漢字含有率の3日分の平均を求めると『東京日日』

は64.0%，『郵便報知』は65.8%で，その差はわずかに1.8%である。つまり代表的大新聞どうしは非常に似かよった状態であるということである。

漢字含有率について第1表からもう一つ気のつくことは，『東京日日』の11月10日（66.1%）と11月13日（60.5%）の間に5.6%の差のあることである。これは『郵便報知』の11月10日（67.7%）と11月13日（63.3%）の間の差（4.4%）より大きく，日付が3日しか違わないことを考えると，その間の事情を少し掘り下げて検討しておく必要がある。この差の生じた原因の特に大きなものは，記事別にみた紙面構成の相違であり，さらに同種の記事においては話題の相違であると思う。そこで次に具体的にその事実を述べてみよう。

明治10年から昭和22年までを10年間隔で調査した『東京日日』の記事別の紙面構成は，この稿の末尾に付けた別表1～11の通りである。そのうちの別表1（明治10年11月10日）と別表3（同年11月13日）の内容を比べてみると次のような事柄が明らかになる。

①第1面の社説はいずれの日も1日分の文字量[注6]の14%以上を占めてよく似た値を示している。そして漢字含有率は11月10日の方が5.2%ほど上回っている。

②第2面の最初から3面に続いているニュース[注7]（電報以外のニュース）は両日とも最大の文字量を誇る記事であり（11月10日はその日全体の56.4%，11月13日は44.6%），この最大規模の記事の漢字含有率は11月10日が6.3%上回っている。

③11月13日の方には（第3面に）「博覧会の記」という記事があり，これは漢字含有率が46.7%で，その日の平均（60.5%）を大きく下回っている。この記事の文字量は②で述べたニュースの11月10日と11月13日の差にほぼ相当する。

主に上記の三つの事柄が影響して1日分の漢字含有率の差を生じたと考えられる。それらのうち①については，両日とも社説の筆者は福地桜痴（源一郎）であると思われる。福地は当時，主筆でもあり社長でもあった。そのこ

ろの記事にはまだ見出しが全くないので，両日の社説の趣旨をまとめてみると11月10日の内容は，西南戦争で功のあった人々に明治天皇が勲章などをお与えになったのは大変良いことであり，こういう叙勲は惜しみなく行ってもらいたい旨である。また，11月13日の内容はわが国の貿易を発展させるための具体的な提言である。漢字含有率において11月10日の方が高いのは，同じく社説ではあるけれども，上記のような内容の「いかめしさ」の違いを反映しているのではないかと考えられる。こういう事情のもとでは5.2%の差は特に問題にすることもないかもしれない。しかし，なるべく客観的に判断するため，こういう比較においては該当する記事の特に相対的文字量を明確にしておかなければならない。そこで，この稿でいう「文字量（絶対的・相対的)」とはどういう内容であるか，ということを次に具体的に述べよう。

この稿でいう「文字量」とは，該当する記事の漢字・ひらがな・カタカナの延べ字数に関する値である。そして「絶対的文字量」とは，延べ字数そのものをいう。また「相対的文字量」とは，延べ字数にもとづいて他との比較がしやすいように，パーセント・指数などのかたちにした値をいう。この稿では各記事の「相対的文字量」を扱うことが多いので，これ以後はまぎらわしくない限り，その意味で「文字量」ということばを使うことにする。もし，まぎらわしいと思われる場合には「絶対的文字量」と「相対的文字量」を区別して記す。

上記の取り決めをふまえて，さきの社説の話にもどっていえば次のように説明することができる。すなわち，明治10年11月10日の社説の文字量はその日の紙面全体の14.4%で，11月13日の社説の文字量はその日の紙面全体の15.0%である。そして，この両日の社説どうしの漢字含有率の差は5.2%である。したがって，これらの社説の漢字含有率の差がその日全体の漢字含有率に影響を及ぼす大きさは，11月10日が5.2%のうちの14.4%で0.8%，11月13日が5.2%のうちの15.0%で0.8%である。つまり11月10日と13日のそれぞれ1日分の漢字含有率に及ぼした社説の影響はいずれも0.8%である。

次に前記の②の事情について説明をしよう。11月10・13両日とも第2面の

最初から3面に続いているニュース（電報以外のニュース）は，10日の文字量がその日の紙面全体の56.4％で，13日の文字量がその日の紙面全体の44.6％である。そして，この両日のニュースどうしの漢字含有率の差は6.3％である。したがって，これらのニュースの漢字含有率の差がその日全体の漢字含有率に影響する大きさは，11月10日が6.3％のうちの56.4％で3.6％，11月13日が6.3％のうちの44.6％で2.8％である。このように，その日の漢字含有率の平均値に最大の影響を及ぼす「ニュース」というのは，いうまでもなく多くの記事が集まって一つの集団を成しており，それらの小さなものはわずか2行のものから大きなものは2段（1段は37行）にわたっているものまでさまざまである。文体も単一ではなく，漢文直訳体が大部分を占め，ごく一部分に候文体のものや「です・ます調」のまじった文章がみえる。

さらに前記の③の事情について説明をしよう。11月13日の方にはニュース記事に続いて「博覧会の記」という記事がある。その文字量（その日全体の9.9％）は11月10日のニュースと11月13日のニュースの文字量の差にほぼ等しい。この「博覧会の記」の漢字含有率（46.7％）はその日全体の漢字含有率（60.5％）を13.8％も下回っている。こういう紙面構成の違いによる差も両日の全体の差に影響を及ぼしているのである。

以上述べてきた事柄は1日分の漢字含有率に影響を及ぼす主な要素であり，その根底に存在する重要な事実は，それぞれの記事はそれぞれ決まった文体で書かれている，ということである。明治時代の初期などには特にそれがはっきりしており，一般に文体の差が漢字含有率の差となって表われていることは明らかである。その事実を具体的に説明するため，明治10年11月10日の紙面を例にとって述べてみよう。

この稿の末尾に付けた別表1にまとめた記事を第1面から順番に検討してゆくことにしよう。まず「太政官記事」・「内務省録事」・「東京府録事」の三者はいずれも候文体で，それらの漢字含有率はすべて90％を越えている。次に「内国勧業博覧会事務局録事」と「仏国博覧会事務局録事」は漢文直訳体で，それらの漢字含有率は候文体には及ばないけれども，その日の平

均をいずれも上回っている。次の「社説」・「ニュース」・「ニュース（外電）」もいずれも漢文直訳体である。ここでまず「社説」について特に注意しておきたいことがある。すなわち，この日のみならず別表1～11のすべてのデータにおいて，「社説」はそれぞれの日の漢字含有率の平均を下回っていることである。この事実は，「社説」は内容がむずかしくても文章をできる限り読みやすいものにして，なるべく多くの人に読んでもらおうとする配慮の表われだと考えられる。その次の「ニュース」と「ニュース（外電）」も明治10年代のデータ（別表1～3）をみる限りにおいて，すべてその日の漢字含有率の平均を下回っており，いずれの日においても「ニュース（外電）」の方が「ニュース」より値が低い。明治10年代では上記の3日分のうち11月13日にだけ「外報」と記したニュース記事があり，その値は同じ日の「ニュース(外電)」と「ニュース」との間におさまっている。この「ニュース（外報）」も当然，漢文直訳体である。ここで11月10日にもどって，残りの第4面の大部分を占めている「株式」・「天気」・「奥付」についていえば，「株式」は候文体で漢字含有率が93.6％にのぼっており，あとの二者はいずれも漢字だけで記された「漢字文」（漢文ではない）である。以上で明治10年代の記事の文体について一通りの説明は終ったわけであるが，その他の記事として11月13日の第3面にみられる「博覧会の記」という，やや娯楽的な臨時の記事がある。この記事は「なり・たり調」に少し「です・ます調」をまぜたもので基本的には文語文である。

さて『東京日日』（『毎日』）の記事の名称については別表1～11に記したものがすべてである。そのうち一つ説明を加えておきたいのは「ニュース」についてである。これに該当する記事をまとめて『東京日日』みずから「雑報」と称しているけれども，それをそのままこの稿で使うと現代の感覚では「埋め草的なニュース」のような意味に受け取られかねないので，「ニュース」と改めた次第である。この場合の「ニュース」が狭義の用法であることはいうまでもない。

ここでこの節の要点をまとめてみると次のようになる。

第2表　小新聞の漢字含有率一覧表

紙　名・日　付	漢　字	ひらがな	カタカナ
『東京絵入新聞』			
明治 10. 1. 20	58.8%	40.5%	0.7%
10. 2. 10	56.5	42.9	0.6
10. 2. 13	58.1	41.4	0.5
『仮名読新聞』			
明治 10. 2. 8	65.3%	33.9%	0.8%
10. 2. 9	68.0	30.7	1.3
10. 3. 12	64.1	34.4	1.5
『かなよみ』			
明治 10. 3. 17	64.6%	34.1%	1.4%
10. 3. 21	62.0	37.0	1.0
10. 3. 22	62.5	35.9	1.6

ⓐ明治10年代の代表的大新聞である『東京日日』と『郵便報知』の漢字含有率について，無作為に選んだ同じ日付の3日分の平均を比べると非常によく似ていて，その差はわずかに1.8%である。

ⓑ『東京日日』においては，互いに接近した日の漢字含有率に最高5.6%の差が生じている。その原因を掘り下げてみると，①記事別にみた紙面構成の違い，②同種の記事においては話題の違いにもとづく用語・用字の違い，などが指摘できる。そして①の場合も結局は各記事の文体の違い，ひいては用語・用字の違いに行き着くのである。

2-2　明治10年代の小新聞の実態

第1章で述べたように小新聞は大新聞にやや遅れて創刊されたが，その新聞社の数は大新聞より多かった。この節では当時の代表的小新聞である『東京絵入新聞』『仮名読新聞』『かなよみ』（以上は上の第2表に掲載した）および『読売新聞』を取り上げて検討する。

第2表に示した三紙の日付は前節で述べた大新聞の場合と同じではないが，11月10日ごろの紙面を今までに閲覧することができなかったので，やむ

なくこのような日付の紙面を使った。なお,『かなよみ』は第1章に記した通り『仮名読新聞』を改題したものであるから両者は全く別物ではないけれども,言語研究の資料としての両者の性格は未調査である。このような点を考えて両者を一応別物として第2表に掲げた。この表に示した三紙それぞれ3日分の漢字含有率の平均は『東京絵入』(57.8%),『仮名読』(65.8%),『かなよみ』(63.0%)である。その他『読売新聞』については明治10年11月10日のデータだけしか得ていないが,その漢字含有率は53.7%,ひらがな含有率は43.0%,カタカナ含有率は3.3%である。この『読売』を合わせた四紙を比べてみると次の事柄が明らかになった。すなわち漢字含有率は『読売』が最も低く,それ以外は順に『東京絵入』・『かなよみ』・『仮名読』というふうに高くなっている。そして最も低い『読売』と最も高い『仮名読』の差は12.1%にのぼっている。"本格的小新聞"であった『読売』は,それよりもっと娯楽的要素の濃い小新聞以上に漢字の使用を抑えたということである。

ここで,前節に記した大新聞二紙とこれら小新聞四紙の漢字含有率を比べてみよう。3日分のデータを出した新聞はそれらの平均をとって値の大きい順に並べると次の通りである。『郵便報知』・『仮名読』(以上いずれも65.8%)・『東京日日』(64.0%)・『かなよみ』(63.0%)・『東京絵入』(57.8%)・『読売』(53.7%)。さらに大新聞二紙の平均と小新聞四紙の平均を比べてみると,大新聞の平均は64.9%,小新聞の平均は60.1%で,大新聞の方が4.8%ほど上回っている。もっとも,小新聞は原則として総ルビであるため大新聞と無条件で比較することはできないが,小新聞といえども漢字をよく使ったものがあり,小新聞の平均値のかなり高いことは注目に値する。ところで,新聞を編集する側として,わずらわしい総ルビにしてまで漢字を多く使った理由としては,①当時非常に根強かった漢字尊重の思想,②分かち書きをしなくてもすむこと,などが考えられる。

以上の結果から明らかなように,明治10年代の代表的小新聞の漢字含有率は平均値がかなり大きく,大新聞の平均値に接近している。そして小新聞を個別にみると『読売』のように漢字含有率のかなり低いものもあれば,『仮

第3表 『東京日日新聞』の漢字含有率一覧表

日付	漢字	ひらがな	カタカナ
明治 10. 11. 10	66.1%	13.8%	20.1%
10. 11. 12	65.3	20.1	14.6
10. 11. 13	60.5	28.0	11.5
20. 11. 10	60.5	35.0	4.5
20. 11. 11	62.4	31.6	6.0
30. 11. 10	60.0	38.4	1.6
40. 11. 10	62.7	34.5	2.8
大正 6. 11. 10	60.5	37.2	2.3
昭和 2. 11. 10	55.5	41.6	2.9
12. 11. 10	54.5	40.9	4.6
22. 11. 10	47.6	46.9	5.5

名読』のように大新聞とその高さを争うようなものまであり，バラエティに富んでいることがわかる。一方，大新聞は二紙の差が1.8％しかなく互いによく似ていて，小新聞の場合と全く対照的である。

2-3 『東京日日新聞』の70年間の実態

この節では『東京日日』(『毎日』) の明治10年から昭和22年までの70年間の実態を10年間隔で調査した結果について述べる。第3表はそのデータである。下限を昭和22年としたのは，調査がここまでしか進んでいないことが第一の理由である。また，この年は第二次大戦が終って間もない時期であり，国語施策の歴史からみても一つの区切りであると考えられるからでもある。さらに，第3表において明治10年代と20年代はそれぞれ3日分と2日分を取り上げ，明治30年～昭和22年までは1日分だけを取り上げた。その理由は結局，1日分の文字量の違いによるのである。要するに1日分の文字量の少ない場合ほど，紙面構成のちょっとした違いなどによって日別の漢字含有率のバラつきは大きくなる可能性がある。それを少しでも修正するため，文字量の少ない明治10年代と20年代は，複数の日数の平均を求めたのである。なお，年代別にみた文字量の違いなどについてはこの節で，のちに詳しく述べる。

第3表の漢字含有率について，明治10年代の3日分の平均を求めると64.0％，同様に明治20年代の2日分の平均は61.5％である。これらの値をそれぞれの年代を代表する値と考えて第3表をながめてみると大体次のような諸点に気がつく。

①漢字含有率の変遷を70年間にわたる大きな流れとしてみた場合，時間の経過とともに次第に低下する傾向がある。

②，①でみた傾向を少しこまかく観察すると，70年の間には特に目立った断層が二箇所ある。それらは大正6年と昭和2年の間（その差は5.0％）および昭和12年と同22年の間（6.9％）である。

これらのうち特に②の現象については次のようなことが頭にうかぶ。すなわち，それら二つの断層のみられる時期にはそれぞれ「常用漢字表」（大正12年5月）と「当用漢字表」（昭和21年11月）が出されており，その影響を受けたのではなかろうか，ということである。ここでは，その可能性も考えられることを指摘しておくにとどめ，この章を書き終えるにあたり，これまでに用いてきたデータの性格についてもう少し説明を加えておきたい。それを次に記す。

新聞の文章（そのうち特にニュース記事のそれ）は一般に没個性的な性格を持ち，その用字においても同様である。この性格は詩歌・小説などの場合とは著しく異なるものである。新聞の記事には（大新聞の場合）明治初期の創刊のころから既に社説・株式もあり，明治20年代以降は小説・講談・スポーツ・芸能などの娯楽的な記事が次々に登場するけれども，その文字量からみても新聞の文章の中心的なものは，やはりニュース記事であると思う[注8]。そして，それに社説や政治・経済関係の解説や新刊紹介のような“硬い”記事を加えたもののグループが大新聞の骨組みを構成していると言い得る。したがって，それら以外の娯楽的記事を合わせた一日分のそれぞれの文章および用語・用字を扱う場合，同一紙であれば，それぞれの一日分はかなり平均した性格を持っていると考えてさしつかえないであろう。

上記の観点に立って漢字含有率に焦点を合わせた場合，この稿で扱う各年

第4表 『東京日日新聞』の文字量一覧表

日付	文字量
明治 10. 11. 10	100
10. 11. 12	100
10. 11. 13	102
20. 11. 10	171
20. 11. 11	172
30. 11. 10	229
40. 11. 10	306
大正 6. 11. 10	382
昭和 2. 11. 10	318
12. 11. 10	295
22. 11. 10	179

(註) 指数による

の日数（原則として1日分，明治10年と20年はそれぞれ3日分と2日分）は巨視的な考察には耐え得るものだと考える。

さらに参考のため『東京日日新聞』(『毎日新聞』) の文字量を第4表にまとめてみた。この表に示した値は明治10年11月10日を基準にして指数で表わした「相対的文字量」である（そのもとになった「絶対的文字量」は別表1～11に示してある)。これらの値をながめてみても明治10年代は特に小さいことがはっきりしている。そのことは，たとえば延べ1,187の漢字が明治10年11月10日の紙面において占める漢字含有率は10.0%であるけれども，それと同じ延べ字数の漢字が大正6年11月10日の紙面においては2.6%（10.0%×100÷382=2.6%，小数点下第二位を四捨五入した）にしか相当しないという例を考えても明らかである。このような点を考えて明治10年と20年はそれぞれ3日分と2日分を扱ったのであり，妥当な措置だと考える。

3. 漢字含有率低下の要因

3-1 内的要因について

この章では一応「内的要因」・「外的要因」の二面に分け，それぞれ1節を設けて考察する。ただし，ここでいう「内的・外的」とは新聞社の「内部・外部に関する」というくらいの意味に用いる。また，説明の便宜上このように二面に分けたが，内容的にはむしろつながりの深い点があることを注意しておきたい。すなわち，年月の経過とともに漢字含有率が低くなってきているのは結局，読みやすい文章をめざして新聞社の内外を問わず努力が続け

られてきたことの一つの表われである。

この節では主に内的要因について述べる。漢字の使用を抑えた新聞社側のねらいについては次のような事柄が考えられる。

①文章を読みやすいものにして，もっと多くの読者を得るため。

②，①を達成し，ひいては国民の教育・文化の水準を上げるため。

③印刷の能率を上げるため。

これらのうち①・②についての説明は不要であろうが，③については少し説明を加える必要があると思う。すなわち，前章の第3節に第4表として文字量の変遷を示した通り，特に大正6年まで文字量はふえ続ける一方であった。また，1日あたりの発行部数も年を追ってどんどんふえ続けた[注9]。それを限られた時間内に印刷し配布するには，少なくとも印刷完了までの能率を上げなければならなかった。このことは有力な新聞社の特に苦心した課題であり，一つには新鋭の輪転機の導入というかたちをとったが，もう一つの対応策として漢字節減も重要なことであった。この漢字節減について『毎日』・『読売』・『朝日』などいずれも積極的に取り組んでいたことは，それぞれの社史をひもといても明らかである。たとえば『毎日新聞七十年』(昭和27年刊) によれば，同社は原敬が社長であった明治32年ごろから社長みずから漢字節減や口語文の採用に意を用いており，原ののちに社長になった本山彦一がこの考えを継承し実行に移した由である (65～68ページ参照)。また，同書によれば大正12年5月に「常用漢字表」が発表されると「八月六日，本社をふくむ新聞通信二十社はその実行に協力することを申合せた。」とある (212ページ)。

また『朝日新聞七十年小史』(昭和24年刊) によれば「この時代 (引用者注――大正10年ごろ～昭和初期) には社説も論説もすべて口語体とし，文部省の漢字制限案に則り，文部省案よりは少しく字数を増加して，わが社独自の制限を行うた。大阪朝日は大正14年5月より，東京朝日はその翌月よりこれを実行し，昭和7年さらに二百余りの漢字を増加した。」(173ページ) ということである。しかし実際に紙面にあたってみると，『東京朝日新聞』で

は大正14年1月30日の第2面に社告が載っており，その趣旨は，本紙の漢字制限を2月1日から実行するということである。そして制限のワクは2,121字であり，その内訳は「常用漢字表」（大正12年5月発表）に載っている1,963字に日常非常によく使われる97字を加え，その他固有名詞によく使われる61字を「補助字」として加えたものである旨を述べている。

このように新聞社内部においても，遅くとも明治末期には文章平明化の一環として漢字節減を行おうとする動きがあったのである。しかし，その実行においては，たとえば小説家がある作品についてそれを行うような場合とは事情がかなり異なっており，結局社会一般に通じるような強力なきっかけがどうしても必要であった。その「強力なきっかけ」となったのは臨時国語調査会の発表した「常用漢字表」（大正12年5月，1,963字）と内閣告示・内閣訓令として公布された「当用漢字表」（昭和21年11月，1,850字）が主なものである。これらを筆者は「外的要因」とよぶことにし，次節において改めて述べることにする。

3-2　外的要因について

さきに述べた通り，有力な新聞社の内部には漢字節減の構想や実行準備が明治の遅くとも末期ごろから徐徐に整ってきていた。そして大正12年5月に至って臨時国語調査会が「常用漢字表」（1,963字）を発表したのである。新聞紙面における大規模な漢字制限が実行に移されたのは，たとえば『東京朝日』の場合，前節で述べた通り「常用漢字表」発表の2年近くのちのことである。『大阪毎日』（『東京日日』）・『読売』などにおいても，実施の時期は『東京朝日』の場合と大きくは違わないであろう。そして第二次大戦後の昭和21年11月に公布された「当用漢字表」については法令・公用文はもとより，新聞や教科書なども積極的にこれに従ったことはよく知られている。これらの国語施策の影響を筆者は「外的要因」とよびたい。それは前節で述べた「内的要因」と相まって新聞の漢字制限がはっきりと行われる力になったのである。

漢字制限の実行と並行して行われた事柄には口語化がある。漢字制限はも

ともと文章の平明化をめざす一つの手段であるから，口語化が並行して行われたのは当然である。それが具体的にどのように行われたかを『東京日日』を例にとってかいつまんでいえば次の通りである。すなわち，明治10年から10年間隔で漢字含有率をみてきたのと同じ日付の紙面を検討すると，明治10年と20年はすべての記事が文語文である。明治30年になると講談のほかに小説が口語文で書かれている。そして明治40年と大正6年の紙面では上記の二種の記事のほかにニュースの一部・学芸の一部・家庭・株式の一部などの記事が口語文で書かれている。昭和2年になると一部のニュースに文語調が混じっているのを除いてすべて口語化し，社説も遂に口語文となった。そして，それ以降の昭和12年も22年もすべての記事が口語文で書かれている。以上の結果から特に注目したいのは，大正6年と昭和2年の間に口語化が最もはっきりと行われたことである。これは既に述べた漢字制限の実施された最初の大きなヤマ場と一致しているということである。

4. おわりに

明治初期に近代的な新聞が創刊されて以来こんにちに至るまで，その文章を読みやすくするために様様な対策が講じられてきたが，それらの実態については明らかにされていない点も多い。

この稿では，漢字含有率の変遷を跡付けることによって，漢字制限の歴史を明らかにしようとした。それは，明治10年から昭和22年までの70年間を10年間隔で調べて分析したものである。また，それと同じ日付の紙面について口語化の実態も調査し分析した。それらの巨視的観点からの考察によって明らかになったのは次の諸点である。

①漢字制限の実態を70年間にわたる大きな流れとしてみた場合，年月の経過とともに次第に進んでゆく傾向がある。

②，①の傾向を少しこまかく観察すると，70年の間には特に目立った断層が二箇所あり，それらは大正6年と昭和2年の間および昭和12年と同22年の間である。これらの時期にはそれぞれ「常用漢字表」(大正12年5月発

表）と「当用漢字表」（昭和21年11月公布）が出されており，それらの「漢字表」の影響を受けて漢字制限を実行に移したことは確かである。

③より読みやすい文章を求めて口語化も並行して行われた。この稿の10年間隔の調査結果によれば，それは明治30年から始まり，明治40年・大正６年とどんどん進んでゆき，昭和２年にはほとんどの記事が口語文になり，社説も遂に口語文になった。そして，昭和12年と22年の記事は，すべて口語文である。

④大正６年と昭和２年の間に最初の大規模な漢字制限が行われたが，それと同じ時期に口語化が最もはっきりと行われた。

＜注＞

（１）この章に記した新聞の歴史については，次の文献を参考にしてまとめた。小野秀雄『日本新聞発達史』（大正11年８月，大阪毎日新聞社・東京日日新聞社刊），小野秀雄『増補新聞の歴史』（昭和45年10月，東京堂出版刊），斎藤久治『新聞生活三十年』（昭和７年12月，新聞通信社刊），西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』（昭和36年８月，至文堂刊），春原昭彦『新訂増補日本新聞通史』（昭和49年５月，現代ジャーナリズム出版会刊），山本武利『近代日本の新聞読者層』（昭和56年６月，法政大学出版局刊），『大日本百科事典（ジャポニカ）』（昭和56年４月，小学館刊，新版）。また，大新聞と小新聞の違いについて，かなり早い時期から観察して詳しく述べたものには，野崎左文の『私の見た明治文壇』（昭和２年５月刊）に収めた論文「明治初期の新聞小説」がある。この論文の初出は『早稲田文学』の大正14年３月号で，単行本に収めるにあたり，本文にはいくらかの補訂がある。「明治初期の新聞小説」は『近代文学回想集』（＝日本近代文学大系㊿，角川書店刊）に，昭和２年刊の単行本の本文を底本にしたものが収められており，その第１章の「大新聞と小新聞」が参考になる。それから，「大新聞」・「小新聞」の明治時代の用例としては，末広鉄腸の『政治小説雪中梅』における「田『どうも大新聞ハ真面目な事ばかりで面白う御坐いません。』や「風ト気が付き，『真逆其の婦人でもありますまい。別して此の節小新聞でハ，形跡もないことを自分で見て来た様に書き立て，跡から正誤を出すことが度々だから信用ハ出来ません。」（以上，いずれも下編第三回）が有名である。もっとも，上記の小新聞についていっている事柄が，すべての小新聞にあてはまるのではないことは，いうまでもない。なお，『政治小説雪中梅』の下編は明治19年11月に刊行されている。引用文は，その初版本を用いて編集された『明治政治小説集』（＝日本近代文学大系②）によった。

（2）・（3）山本武利『近代日本の新聞読者層』80ページ。

（4）明治8年，政府は讒謗律とともに新聞紙条例を公布し，教唆扇動・政府変壊・成法非難を禁じ，違反者には刑罰を科し，翌年には更に付加規則で内務卿に国安妨害記事についての発禁などの行政処分権を認め，明治13年には風俗壊乱記事もこれに加えた。その後何回かの改訂を経たのち，明治42年，新聞紙法によって受け継がれ，昭和20年9月に効力を失うまで続いたのである（法律の廃止は昭和24年5月）。

（5）明治10年において11月10・12・13日を選んだ理由は次の通りである。すなわち，この年は西南戦争のあった年であり，少くとも1月30日（私学校生徒による火薬局・造船所の占領）～9月24日（戦争の終結）ごろまでの紙面を調査対象に選ぶのは，できるだけ避けた方が良いと思われる。なぜならば，その期間の紙面には，この戦争の記事がよく載ったために，紙面構成や用語，ひいては用字にまで平常時とは異なる点が生じた可能性があるからである。そして，上記の戦争の期間を除いた中から無作為に11月10日を選び，この稿で『東京日日新聞』について10年間隔で調査する他の年も同じく11月10日の紙面を取り上げることにした。なお，各年の文字量（注6を参照）をそろえるため，明治10年は11月12・13日（11日は休刊日）を10日と合わせて取り上げることにし，明治20年は11月10・11日の2日分を取り上げることにした。その，文字量をそろえた事情については第2章第3節の初めにやや詳しく述べた。

（6）この稿でいう「文字量」については，本文の214ページに詳しく述べてある通り，漢字・ひらがな・カタカナの延べ字数に関する値である。

（7）『東京日日新聞』では，これに該当する記事をまとめて「雑報」と称しているが，その名称をそのまま使うと，現代の感覚では「埋め草的なニュース」程度の意味に受け取られかねないので，これらの報道記事を「ニュース」といっておく。このことは本文の216ページにも述べておいた。

（8）この稿の末尾に付けた別表1～11を参照。

（9）『毎日新聞七十年』（昭和27年2月，毎日新聞社刊）の612～613ページにかけて「毎日新聞発行部数表」が載っている。これには『東京日日新聞』の経営が大阪毎日新聞社の手に移った明治44年以降の，『東京日日』の1日あたりの発行部数も記されている。それによれば，明治44年は約76,000部，大正6年は約313,000部，昭和2年は約814,000部，昭和12年は約1,432,000部，昭和22年は約1,464,000部というふえ方である。

＜参考文献＞（注・本文に記したものは除く）

杉村楚人冠（広太郎）『最近新聞紙学』（大正5年9月，慶応義塾出版局刊。昭和45

年4月復刊，中央大学出版部）
国立国語研究所『明治初期の新聞の用語』（＝国研報告・15，昭和34年3月，秀英出版刊）
吉田澄夫・井之口有一（編）『明治以降国字問題諸案集成』（昭和37年7月，風間書房刊）
読売新聞百年史編集委員会（編）『読売新聞百年史』〔資料・年表は別冊〕（昭和51年11月，読売新聞社刊）
林大「日本語の正書法」・松原純一「漢字かなまじり文の問題点」（いずれも『現代作文講座⑥文字と表記』所収，昭和52年4月，明治書院刊）
野元菊雄「話しことばに近づく新聞文章」・斎賀秀夫「表記法の移り変わり」（いずれも『ことばの昭和史』所収，昭和53年1月，朝日新聞社刊）

別表1　『東京日日新聞』明治10.11.10（土）

	記事の名称	漢字	ひらがな	カタカナ
1面	太政官記事	37（100%）	／	／
	内務省録事	726(99.4)	／	4(0.6%)
	東京府録事	109(92.4)	／	9(7.6)
	内国勧業博覧会事務局録事	82(68.9)	／	37(31.1)
	仏国博覧会事務局録事	351(88.4)	／	46(11.6)
	社説	1,021(59.7)	／	688(40.3)
2面	ニュース	4,077(60.8)	1,572(23.5%)	1,050(15.7)
3面	ニュース(外電)	476(46.5)	／	548(53.5)
4面	株式	906(93.6)	62(6.4)	／
	天気	21(100)	／	／
	奥付	43(100)	／	／
	総計　11,874(100%)	7,849(66.1)	1,634(13.8)	2,391(20.1)

(注)　カッコのない数字は使用度数，カッコ内の数字はそれぞれ漢字・かな含有率（単位はパーセント）を表わす。なお，広告・図表は除く。

別表2　『東京日日新聞』明治10.11.12（月）

	記事の名称	漢字	ひらがな	カタカナ
1面	太政官記事	505(84.2%)	／	95(15.8%)
	内務省録事	991(94.7)	／	55(5.3)
	大蔵省録事	66(93.0)	／	5(7.0)
	工部省録事	185(77.1)	／	55(22.9)
	東京警視本署録事	390(64.0)	／	219(36.0)
	東京府録事	483(88.8)	／	61(11.2)
2面	社説	938(53.5)	／	816(46.5)
3面	ニュース	2,214(56.3)	1,685(42.8%)	36(0.9)
	博覧会の記	680(54.5)	566(45.4)	1(0.1)
	ニュース(外電)	400(49.4)	13(1.6)	396(49.0)
4面	株式	854(86.7)	131(13.3)	／
	天気	27(100)	／	／
	奥付	44(100)	／	／
	総計　11,911(100%)	7,777(65.3)	2,395(20.1)	1,739(14.6)

別表3 『東京日日新聞』明治10.11.13（火）

	記事の名称	漢字	ひらがな	カタカナ
1面	太政官記事	34(100%)	／	／
	陸軍省録事	237(84.3)	／	44(15.7%)
	東京警視本署録事	64(95.5)	／	3(4.5)
	仏国博覧会事務局録事	929(89.1)	2(0.2%)	111(10.7)
	社説	986(54.5)	／	822(45.5)
2面	ニュース	2,932(54.5)	2,356(43.8)	91(1.7)
3面	博覧会の記	556(46.7)	631(52.9)	5(0.4)
	ニュース(外電)	158(45.1)	／	192(54.9)
4面	ニュース(外報)	483(52.6)	321(34.9)	115(12.5)
	株式	828(92.4)	68(7.6)	／
	天気	54(100)	／	／
	奥付	44(100)	／	／
	総計 12,066(100%)	7,305(60.5)	3,378(28.0)	1,383(11.5)

別表4 『東京日日新聞』明治20.11.10（木）

	記事の名称	漢字	ひらがな	カタカナ
1面	官報	1,302(62.5%)	491(23.6%)	290(13.9%)
	ニュース(外電)	770(46.1)	838(50.2)	61(3.7)
2面	社説	922(48.5)	978(51.4)	2(0.1)
	宮廷録事	132(71.3)	53(28.7)	／
	ニュース(内電)	35(79.5)	9(20.5)	／
	ニュース(外電)	216(52.3)	136(32.9)	61(14.8)
	ニュース	472(58.5)	292(36.2)	43(5.3)
3面	ニュース	2,167(62.2)	1,272(36.5)	45(1.3)
	株式	282(64.0)	147(33.3)	12(2.7)
4面	ニュース	1,284(59.1)	845(38.9)	44(2.0)
	ニュース(外電)	540(54.9)	443(45.0)	1(0.1)
	ニュース(内電)	348(54.7)	284(44.7)	4(0.6)
	ニュース(内電)	485(71.5)	187(27.5)	7(1.0)
5面	小説(翻訳)	1,015(46.2)	1,113(50.7)	69(3.1)
	正誤など	37(82.2)	8(17.8)	／
	ニュース	149(66.2)	2(0.9)	74(32.9)

6面	ニュース	858(81.4)	／	196(18.6)
	天気	30(100)	／	／
	株式	1,221(100)	／	／
	総計 20,272(100%)	12,265(60.5)	7,098(35.0)	909(4.5)

別表5 『東京日日新聞』明治20.11.11（金）

	記事の名称	漢字	ひらがな	カタカナ
1面	官報	265(76.6%)	／	81(23.4%)
	ニュース(外報・署名)	1,289(52.5)	1,009(41.2%)	154(6.3)
	ニュース(外報)	217(66.2)	111(33.8)	／
2面	社説	1,186(59.9)	795(40.1)	／
	宮廷録事	247(74.2)	86(25.8)	／
	ニュース(内電)	103(72.0)	40(28.0)	／
	ニュース(外電)	114(58.7)	56(28.9)	24(12.4)
	ニュース	368(61.3)	228(37.9)	5(0.8)
3面	ニュース	2,043(67.4)	956(31.6)	29(1.0)
	株式	282(66.0)	137(32.1)	8(1.9)
4面	ニュース	2,196(52.9)	1,755(42.3)	197(4.8)
5面	ニュース(内電)	461(62.0)	272(36.6)	10(1.4)
	小説(翻訳)	833(43.6)	1,023(53.5)	56(2.9)
6面	ニュース	1,838(73.5)	／	661(26.5)
	天気	30(100)	／	／
	株式	1,292(99.9)	／	1(0.1)
	総計 20,458(100%)	12,764(62.4)	6,468(31.6)	1,226(6.0)

(注) 第7・8面は全面広告

別表6 『東京日日新聞』明治30.11.10（水）

	記事の名称	漢字	ひらがな	カタカナ
1面	ニュース(外報)	1,403(57.0%)	990(40.2%)	68(2.8%)
	小説	727(51.1)	692(48.6)	4(0.3)
2面	社説	1,955(57.5)	1,439(42.4)	4(0.1)
	ニュース	1,670(60.4)	1,079(39.0)	16(0.6)
	近事片々	819(65.3)	424(33.8)	11(0.9)

	記事の名称	漢字	ひらがな	カタカナ
3面	ニュース(内電)	491(82.4%)	100(16.8%)	5(0.8%)
	ニュース	3,441(64.5)	1,790(33.5)	107(2.0)
	正誤	119(56.7)	91(43.3)	／
	漢詩	174(96.7)	6(3.3)	／
4面	ニュース	728(67.2)	337(31.1)	18(1.7)
5面	株式	3,712(59.4)	2,465(39.4)	76(1.2)
6面	株式	261(72.7)	97(27.0)	1(0.3)
7面	講談	704(40.9)	903(52.4)	116(6.8)
8面	天気	144(86.2)	23(13.8)	／
	総計 27,210(100%)	16,348(60.0)	10,436(38.4)	426(1.6)

別表7 『東京日日新聞』明治40.11.10（日）

	記事の名称	漢字	ひらがな	カタカナ
1面	ニュース(署名)	669(58.1%)	452(39.2%)	31(2.7%)
	ニュース	525(74.1)	183(25.9)	／
	ニュース(署名)	233(54.8)	192(45.2)	／
	学芸(署名)	375(100)	／	／
	新刊	504(64.3)	269(34.3)	11(1.4)
	学芸(署名)	632(51.8)	587(48.2)	／
2面	社説	1,011(53.0)	896(47.0)	／
	ニュース	2,965(70.3)	1,225(29.0)	29(0.7)
	近事片々	691(68.3)	320(31.7)	／
3面	ニュース(外電)	893(69.1)	368(28.5)	31(2.4)
	ニュース(内電)	978(68.7)	438(30.7)	9(0.6)
	ニュース(外電)	294(69.6)	124(29.4)	4(1.0)
	ニュース	1,935(66.2)	942(32.2)	46(1.6)
	天気	116(76.3)	36(23.7)	／
4面	ニュース(外電)	966(59.5)	540(33.3)	117(7.2)
	ニュース(内電)	623(68.5)	283(31.1)	4(0.4)
	ニュース	1,379(65.1)	717(33.8)	23(1.1)
	スポーツ	1,033(47.8)	757(35.0)	371(17.2)
	学芸	609(89.2)	63(9.2)	11(1.6)
5面	ニュース	1,262(56.8)	873(39.3)	87(3.9)
	俳歌	178(55.6)	142(44.4)	／
6面	小説	605(50.1)	602(49.9)	／

	記事の名称	漢字	ひらがな	カタカナ
7面	ニュース	2,429(57.0%)	1,820(42.7%)	12(0.3%)
	スポーツ	533(61.7)	163(18.9)	167(19.4)
	ニュース	194(66.0)	92(31.3)	8(2.7)
	学芸(署名)	233(45.3)	250(48.5)	32(6.2)
	学芸	404(80.5)	94(18.7)	4(0.8)
	芸能	434(78.0)	120(21.6)	2(0.4)
	天気	114(95.8)	5(4.2)	／
8面	株式	2,767(59.1)	1,872(40.0)	41(0.9)
	総計 36,369(100%)	22,817(62.7)	12,553(34.5)	999(2.8)

別表 8 『東京日日新聞』大正 6.11.10 (土)

	記事の名称	漢字	ひらがな	カタカナ
2面	ニュース(外電)	4,309(59.6%)	2,550(35.3%)	369(5.1%)
	ニュース	717(68.4)	319(30.5)	11(1.1)
	余録	122(43.4)	139(49.5)	20(7.1)
3面	社説	888(53.0)	786(47.0)	／
	ニュース	3,808(61.5)	2,240(36.2)	145(2.3)
	ニュース(内電)	220(57.1)	162(42.1)	3(0.8)
	学芸(署名)	583(51.3)	554(48.7)	／
	近事片々	374(69.0)	168(31.0)	／
4面	小説	451(41.7)	624(57.7)	6(0.6)
	学芸	272(59.1)	188(40.9)	／
	学芸(署名)	764(49.6)	771(50.1)	4(0.3)
	芸能(署名)	259(56.0)	198(42.9)	5(1.1)
	芸能	170(81.3)	35(16.8)	4(1.9)
5面	ニュース(署名)	718(51.6)	502(36.1)	171(12.3)
	ニュース(外電)	51(56.7)	27(30.0)	12(13.3)
	ニュース	1,642(77.9)	456(21.7)	8(0.4)
	小説	558(55.2)	453(44.8)	／
	学芸(署名)	407(53.4)	352(46.2)	3(0.4)
	新刊	484(75.6)	147(23.0)	9(1.4)
6面	講談	586(48.8)	605(50.3)	11(0.9)
	家庭	75(41.2)	107(58.8)	／
	ニュース	613(71.9)	239(28.0)	1(0.1)
	芸能	177(97.2)	5(2.8)	／
	俳歌	353(66.3)	177(33.3)	2(0.4)
	将棋	147(79.4)	34(18.4)	4(2.2)

	記事の名称	漢字	ひらがな	カタカナ
7面	ニュース	1,979(54.9%)	1,495(41.5%)	131(3.6%)
	ニュース(内電)	1,760(69.9)	731(29.1)	24(1.0)
	スポーツ	211(99.5)	1(0.5)	／
	雑記帳	161(44.7)	184(51.1)	15(4.2)
8面	株式	4,563(62.9)	2,631(36.2)	68(0.9)
	総計 45,328(100%)	27,422(60.5)	16,880(37.2)	1,026(2.3)

(注) 第1面は全面広告

別表9 『東京日日新聞』昭和 2.11.10 (木)

	記事の名称	漢字	ひらがな	カタカナ
2面	ニュース	4,934(60.7%)	3,174(39.0%)	23(0.3%)
	ニュース(外電)	739(58.9)	500(39.8)	16(1.3)
	余録	158(54.3)	128(44.0)	5(1.7)
3面	社説	618(42.0)	841(57.2)	12(0.8)
	ニュース	3,997(65.5)	2,024(33.2)	77(1.3)
	ニュース(署名)	738(43.6)	943(55.8)	10(0.6)
	放電塔	153(49.0)	147(47.1)	12(3.9)
4面	学芸(署名)	205(31.7)	314(48.6)	127(19.7)
	学芸(署名)	473(34.1)	895(64.4)	21(1.5)
	学芸(署名)	716(40.7)	1,004(57.1)	39(2.2)
	ざつろく	385(54.6)	264(37.5)	56(7.9)
	投書	303(68.4)	132(29.8)	8(1.8)
5面	小説	518(28.6)	1,273(70.2)	22(1.2)
	俳句会	38(88.4)	5(11.6)	／
	新刊	156(66.1)	80(33.9)	／
	将棋	296(76.1)	89(22.9)	4(1.0)
6面	スポーツ	1,193(62.5)	476(24.9)	241(12.6)
	ニュース	975(59.4)	557(33.9)	111(6.7)
	ニュース(外電)	136(71.6)	54(28.4)	／
7面	ニュース	4,126(58.1)	2,693(38.0)	277(3.9)
	雑記帳	119(45.1)	129(48.8)	16(6.1)
	総計 37,775(100%)	20,976(55.5)	15,722(41.6)	1,077(2.9)

(注) 第1・8面は全面広告

別表10 『東京日日新聞』昭和12.11.10（水）

	記事の名称	漢字	ひらがな	カタカナ
2面	ニュース(外電)	2,315(60.3%)	1,465(38.1%)	61(1.6%)
	ニュース(解説)	391(49.0)	372(46.6)	35(4.4)
	余録	397(53.1)	324(43.4)	26(3.5)
3面	社説	863(41.4)	1,089(52.3)	131(6.3)
	ニュース	1,606(59.8)	1,051(39.1)	29(1.1)
	ニュース(外電)	73(47.4)	42(27.3)	39(25.3)
	投書	174(47.8)	183(50.3)	7(1.9)
4面	ニュース(外電)	472(61.3)	262(34.0)	36(4.7)
	ニュース(外電)	104(61.5)	53(31.4)	12(7.1)
	ニュース(内電)	719(61.6)	427(36.6)	21(1.8)
	ニュース(内電)	144(64.0)	64(28.4)	17(7.6)
	ニュース	2,195(56.3)	1,519(39.0)	182(4.7)
	株式	51(70.8)	21(29.2)	／
	放電塔	164(50.7)	151(46.8)	8(2.5)
7面	小説	381(34.5)	683(61.9)	40(3.6)
	学芸	88(100)	／	／
	ラジオ	1,218(58.6)	750(36.1)	109(5.3)
	ラジオ(投書)	160(30.5)	292(55.6)	73(13.9)
	学芸(署名)	924(64.8)	460(32.3)	41(2.9)
9面	スポーツ	2,628(62.6)	1,066(25.4)	504(12.0)
10面	家庭	893(42.4)	1,145(54.3)	70(3.3)
	家庭(署名)	203(39.7)	309(60.3)	／
11面	ニュース	739(48.9)	691(45.7)	82(5.4)
	ニュース(外電)	564(37.3)	907(60.0)	41(2.7)
	ニュース(外電)	215(54.3)	172(43.4)	9(2.3)
	ニュース(内電)	570(50.0)	532(46.6)	39(3.4)
	天気	56(86.1)	9(13.9)	／
	雑記帳	157(53.2)	132(44.8)	6(2.0)
	ニュース(内電)	69(83.1)	14(16.9)	／
	ニュース	559(76.2)	174(23.7)	1(0.1)
	総計 35,070(100%)	19,092(54.5)	14,359(40.9)	1,619(4.6)

㊟ 第1・5・6・8面は全面広告

別表11 『毎日新聞』昭和22.11.10（月）

	記事の名称	漢字	ひらがな	カタカナ
1面	ニュース(AP＝共同)	509(40.9%)	621(49.9%)	114(9.2%)
	ニュース(外電)	206(52.4)	153(38.9)	34(8.7)
	ニュース(USIS＝共同)	296(57.3)	179(34.6)	42(8.1)
	ニュース(外電)	53(46.9)	41(36.3)	19(16.8)
	ニュース(AP＝共同)	148(62.4)	75(31.7)	14(5.9)
	ニュース(APハイタワー記者＝共同)	84(47.1)	77(43.3)	17(9.6)
	ニュース(外電)	118(38.2)	103(33.3)	88(28.5)
	ニュース(ロイター＝共同)	74(60.2)	41(33.3)	8(6.5)
	社説	595(37.4)	982(61.8)	13(0.8)
	ニュース(署名)	706(41.5)	953(56.1)	41(2.4)
	時の問題	633(54.7)	517(44.7)	7(0.6)
	ニュース	195(42.4)	183(39.9)	81(17.7)
	株式	140(70.3)	59(29.7)	／
	余録	195(37.6)	290(56.0)	33(6.4)
	ニュース	128(94.1)	8(5.9)	／
	ニュース	690(49.8)	673(48.5)	24(1.7)
	ニュース	220(54.9)	179(44.6)	2(0.5)
2面	ニュース	894(49.0)	833(45.7)	96(5.3)
	ニュース	252(44.8)	301(53.4)	10(1.8)
	ニュース	713(53.1)	572(42.6)	58(4.3)
	ニュース	149(45.0)	165(49.9)	17(5.1)
	学芸(署名)	613(44.3)	750(54.1)	22(1.6)
	学芸(署名)	401(37.7)	657(61.6)	7(0.7)
	スポーツ	183(49.2)	／	189(50.8)
	ニュース	182(73.7)	65(26.3)	／
	スポーツ	764(78.3)	156(16.0)	56(5.7)
	雑記帳	97(34.2)	175(61.6)	12(4.2)
	天気	22(52.4)	20(47.6)	／
	囲碁	187(45.6)	189(46.1)	34(8.3)
	ラジオ	263(62.7)	64(15.3)	92(22.0)
	小説	324(27.3)	849(71.4)	15(1.3)
	ニュース	90(60.0)	44(29.3)	16(10.7)
	総計 21,259(100%)	10,124(47.6)	9,974(46.9)	1,161(5.5)

〔付記〕この稿で中心資料として用いた『東京日日新聞』（のちに『毎日新聞』となる）に関しては，かつて昭和44～46年にかけて「現代語の形成過程に関する基礎的研究」というテーマで科学研究補助金（一般研究B，代表・岩淵悦太郎）を受けた際に作成した資料の一部を利用した。